校長室だより～燦燦～ №６８０

疾風に勁草を知る

2023.1.5

「疾風に勁草を知る」この言葉を知ってから１０年ほどになる。疾風勁草、強い風が吹いたときに立っている草、それが本当に強い草である。つまり、困難や試練に直面したときに初めて、その人の強さがわかるということである。

思えば、東日本大震災以降、試練の連続である。三度襲った大きな地震、大雨による水害、台風、大雪と毎年のように自然災害が続く。加えて、新型コロナウイルス感染症である。風評被害も放射線の影響も、未だに解決してはいない。

困難な状況が続くと、それが当たり前になってくる。試練慣れしてくる。異常気象が毎年続くと、もはやそれが通常であるかのようである。新たな年を迎えても、状況は大きくは変わらないだろう。期待できるとすれば、新型コロナウイルス感染症が、ようやく収束に向かうかもしれないということくらいだろうか。過去の歴史から考えると、そろそろ終息するはずなのだが。

今年も、勁草になる覚悟が必要である。事態はさらに悪くなるかもしれない。新たな困難が待ち受けているかもしれない。それでも、学校は教育という営みを止めるわけにはいかない。一斉休校などにより、いかに日常の教育活動が大切かを学んだ。子どもたちの人生に影響するような教育の停滞は避けなければならない。

新型コロナウイルス感染症により、マニュアルが役立たないような難局を、知恵で打開することを学んだ。そこでは、難敵をしなやかに受けて堅実に乗り切るためのリーダーと強い組織が必要となる。知恵を出し合えるような組織と、それを束ねるリーダーが求められる。疾風に耐えてこそ、強い人、強い組織と言えるのだろう。

疾風勁草という言葉を教えてくれた方は、震災への思いが強い人物だった。震災の影響は、まだまだ続く。これからは語り継ぐという営みも必要となる。震災を経験していない子どもたちが増えていく。その一方で、震災を経験した若者たちの中には、意志や信念をもち、社会で活躍している人たちがたくさんいる。震災そのものだけでなく、そういった人たちのことも伝えていかなければならない。それができるのが学校であろう。

先が読めない時代に生きる子どもたちに、しなやかさと力強さを身につけさせなければならない。すなわち、勁草である。次の時代を担う人材である。彼らに、何を託すのか。そのことを考えながら、新たな年を意義あるものにしていきたい。